

### 3. 馬刀潟タオルからマテガタタオルへ

馬刀潟タオルでは、大西正夫商店以外に数件のタオル専門問屋や寝具メーカーへもタオルを卸していたが、その割合は全体の3割程度だった。そのため、大西正夫商店が倒産したのち馬刀潟タオルの仕事は激減した。

なんとかして倒産を免れようと、家族みな必死だった。受注が減った分、織機を遊ばせないように新規の仕事をとってくる必要があった。貯蓄を食い潰しながら給料や固定費を賄い、タオルづくりをストップさせないために借金をした。家族総勢で、朝6時から夜8時半まで休みなくタオルをつくりつづけた。タオルを売って集金しても銀行に入金する毎日はず変わらずだが、倒産させずになんとかもち堪えることができた。

### 自分はこのままではダメになる

一方で村上雪美氏の心は砕け散る寸前だった。「このままでは自分がダメになる、ろくでもない人間になるのではないか」と村上氏は悩んだ。「とにかくタオルから逃げたい。タオルから逃げて何か別の仕事をしよう」と、自分のためにいったんタオルから離れる決心をする。

高校を卒業してすぐに馬刀潟タオルに入社した村上氏は、タオル一筋でほかの仕事に就いたことはない。両親からは、「世間知らずのお前はタオル以外の仕事はつづかない。事務所に座っているだけじゃなくてバリバリ仕事せないかんし、冷蔵庫開けたり閉めたり、食べ物の番が仕事じゃないんぞ」と言われた。それは、村上氏自身も十分に理解していた。

生活リズムが変わる不安もあって、様子見で半日勤務のパートタイムの仕事を探した。今治市は「タオル」と「造船」の街であり、モノづくりに携わる人が多い。市内にはそういった人のための作業

服を専門に扱う小売店がいくつもある。ちょうど、ある作業服専門店で募集があり、渡りに船を得るように採用が決まった。

作業服専門店では、値札付けや商品陳列、レジ打ち、接客などがおもな仕事だった。接客では、村上氏がもっとも苦手とする「言葉づかい」を教えてもらった。どうしても波方弁が出てしまうからだ。村上氏と同世代の同僚もおり、仕事の合間のおしゃべりは楽しかった。上司もよくしてくれた。作業服専門店での日々を送るうちに、心の傷は少しずつ癒えていった。心身ともに安定し、また以前のようにタオルの仕事もやってみようとおもえるようになった。そして、家業も手伝うようになり、2つの仕事を両立する生活が村上氏にとってちょうどよかった。しかし、それから間を置かずに、村上氏にふたたび試練が降りかかる。

## 父親の病気をきっかけにタオル工場を縮小

2007年、タオル景気がよくなるうちに父親が網膜色素変性症という病気を患った。現在の医学では治療法がない遺伝性の難病である。父親の腕があつての馬刀湯タオルだったが、この病気で目がみえづらくなり、タオルづくりを縮小せざるを得なくなった。織機は動かすことはできても、修繕するには限界があつた。

そして、工場の縮小から4年後の2011年、母親が織機のうえから落下し入院するほどの大ケガを負った。母親は痛くて辛かったはずなのに、何ひとつ弱音を吐かなかつた。しかし、持病の糖尿病と大ケガで薬の摂取量が増えて体調を崩し、そのまま2014年9月にこの世を去った。母親は、若い頃からハイカラで明るく、いつも前向きで器の大きい人だった。馬刀湯タオルの発展は母親とともにあり、そんな母親に村上氏は何度も助けられた。

タオルが縁で母親と結ばれ、いつも仕事に誠実に向き合っていた父親は、母親の死から5年後の2019年7月にあとを追うように病気で亡くなった。生前、両親はこんなことを言っていた。「倒産せ

ずに縮小できることが幸せやね。迷惑をかけずに終われそうやね。」

2019年8月、馬刀湯タオル（株）はマテガタタオルに改組・改称され、村上氏が代表（個人事業主）となってタオル工場を引き継いだ。工場には、父親が生前つくったタオルがたくさん残っていた。「父親の大切なタオルを手元に残したい。でも喜んでもらえるなら売って少しでもマテガタタオルを延命させたい。」そんな複雑な思いを抱きながら、村上氏は両親が創業したタオル工場をいまでも守っている。



海山<sup>おみやま</sup>と名付けられたタオルマフラー  
裏ガーゼ織で無燃糸とレーヨンを使用



塔ノ峰<sup>とうのみね</sup>と名付けられたタオルマフラー  
メッシュ織で無燃糸とレーヨンを使用

問屋の倒産から長い間、<sup>いわ</sup>謂れもない<sup>はずかし</sup>辱めを受けたり、親しかった人が離れていったり、大切な人との別れがあったり、村上氏にとって長く暗いトンネルのなかをあてどなく彷徨う日々だった。あんなに好きだったタオルが嫌いにもなった。タオルを憎んでもどうにもならないことはわかっていたが、ただただどうすればいいのか、わ

からなかった。

## 「人に泣かされても泣かしてはいけない」

両親が創業したタオル工場の盛衰を身近でみてきて、村上氏は「商売は簡単ではない」と常々感じている。何年も月日を重ねて信頼を得て真面目に商売をつづけても、一瞬で人に裏切られたり、冷遇されたりすることがある。タオルづくりに誇りをもっていた父親は、「人に泣かされても人を泣かしてはいけない」と生前よく言っていたが、若かった村上氏はこの言葉に納得できなかった。「じゃあ、自分たちは何も悪いことしていないのに、がまんして泣けてことなのか？そもそも泣かされる方が悪いのか？」と頭のなかで整理がつかないまま、がまんを強いられた20代であった。

自虐的とも言える状況を救ってくれたのは、やはり家族、とくに母親だった。「わたしは、母の性格を1ミクロンも譲り受けていないのかと疑うくらいマイナス思考のときがあります。大ケガをして大変な状況の母にパワーもらってました。」

家族以外にもそばにいて助けてくれた人たちがいた。福岡県鞍手郡に住む母方の親戚や馬刀漣タオル時代に世話になった父の知人の小笠原久枝氏と小笠原齊氏、そして作業服専門店の人びとである。

商売をつうじて失ったものもあれば、得たものもある。村上氏は言う。「わたしはその人たちに感謝の気持ちでいっぱいです。わたしや家族を信じて、そして励ましてくれました。お金もちの人はたくさんいるとおもいますが、お金で買えないものがあります。それは人の心だとおもいます。」

## 4. 「タオル縫製士養成所」の開設

タオルは、赤ん坊から大人まで誰もが日常につかう必需品であり、

原糸からタオルになるまで晒染や製織、捺染、縫製などいくつもの工程をへてようやく仕上がる。タオル一枚つくるにも千枚つくるにも、おなじように数多くの人手が必要である。それゆえに、タオル工業は地域を支える産業として栄えてきたわけであるが、タオル業界が抱える深刻な問題のひとつが労働力不足である。タオルの仕上げ工程である縫製（ヘム縫い）も例外ではない。

## 「タオル屋の娘」の復活

村上氏は、ついこの間の自分を振り返ってこう言う。「タオル工場を継ぐことができず、親不孝ものだといつもうしろめたさがありました。あとを継ぐどころか、早くタオルから遠ざかりたいとおもっていましたから、両親の病気やケガのことも重なり、このままタオルとは縁が切れていくのかなと漠然と考えていました。」

そんな村上氏にある出来事が起こった。2022年11月、村上氏は、今治タオル工業組合主催の「賛助会員に関する説明会」に参加した。父親から引き継いだマテガタタオルは、タオル製造はしないが販売をおこなっているため、組合員から賛助会員へ転向した。

説明会終了後、同組合の応接室で組合専務の木村忠司氏と雑談をしているときに、「タオルの縫製が間にあっておらんのよ。誰かミシンできる人おらんかろか？」と木村氏から話が切り出された。村上氏は、「誰かいるんじゃない？」と返したら、「そうよ、お前縫えるんよのお」と専務が閃いたかのように村上氏に投げた。この一言から、話はとんとん拍子に進んだ。村上氏は、馬刀渦タオル時代に事務から営業、縫製、配送など、父親と母親が担っていた整経以外は何でもこなしていた。縫製は手慣れたものである。タオル業界のこともよく知っている。

ただひとつ、大きなハードルがあった。15年間仕事で世話になった作業服専門店のパートタイムをどうするかだった。作業服専門店での業務は楽しかったし、人にも恵まれた。しかし、作業服に関し

ではタオルと違って専門的な知識がなく、体に染みついた「自信」がなかった。タオルの生産工程は知っているが、作業服は知らない。タオルは誰がつくっているか知っているが、作業服は知らない。「タオル屋の娘」だから仕方ないが、縫製技術者を養成するという任務は村上氏にとってタオル業界への恩返しの意味もあった。他方、作業服専門店を急遽辞めるとなると業務上迷惑をかけるし、家族の一員のようにとてもよくしてもらったから、「辞める」とも言いづらい。迷い悩んで熟考した結果、「タオル関係者の誰かの助けになるんやったら、縫製の仕事をやってみよう」とおもった。

作業服専門店に事の経緯とみずからの思いを伝えると、惜しまれながらも快く背中を押してくれた。引き継ぎを含め2ヶ月間は作業服専門店で働くことを決め、2023年1月11日に組合事務所を訪問し「私でよかったらやります」と木村氏に告げた。1月11日は敬愛する母親の誕生日である。この日を選んだのは村上氏の決意表明でもある。そして、村上氏は、2023年3月1日に正式に今治繊維リソースセンターの「タオル縫製士養成所」指導者に就任した。

「タオル縫製士養成所」の開設は、今治タオル工業組合の念願だったこともあり、村上氏に大きな期待が寄せされた。中古の動力ミシンを10台設置するという以外、細かい内容は何も決まっておらず、ほぼゼロからの立ち上げだった。そのため、村上氏は開所までのおよそ4ヶ月間、準備に追われた。ミシン10台で生徒を何人指導できるのか、週に何回・何時間の指導が可能なのか、月に何人の生徒を受け入れるのか、どれだけの練習時間で技術を修得させることができるのか、練習用のタオルは一人当たり何枚必要なのかなど、頭のなかで繰り返しシミュレーションをしてみてもやってみないとわからないことだらけで、企画書をつくるのに四苦八苦した。

## 「タオル縫製士養成所」開設

今治タオル工業組合は、2023年7月12日に「タオル縫製士養成所」を今治市立旧城東小学校の建物の一部（理科室）を借りて開校した。同養成所には予定どおり工業用ミシン10台が設置され、週3日（月・水・金）の1ヶ月コースと週2日（火・木）の2ヶ月コースを設けて受講生の募集がはじまった。

開校式では、今治タオル工業組合理事長・正岡裕志氏が「人材不足は喫緊<sup>きつ きん</sup>の課題で、縫製業務を知ってもらう場が必要だった。実践的に学ぶ場にし、人材を一人でも多く養成したい」（「読売新聞」2023年7月13日、28頁）と挨拶し、今治市長の徳永繁樹氏も駆けつけて花を添えた。当日の様子はマスコミでとり上げられ、地元では話題になった（「NHK」「テレビ愛媛」「今治CATV」「読売新聞」「繊維ニュース」など）。そして、同年9月に第1期の生徒を迎え、各コースがスタートした。

タオルの仕上工程のひとつであるヘム縫いは、タオルの短辺側の両端をミシンで縫う作業であり、昔から人の手でおこなわれている。縫製士養成の背景には、縫製技術者の高齢化や後継者不足による担い手不足にある。かつては今治の多くの女性が農作業の合間に家内労働としてヘム縫いに従事していたが、現在は農業の衰退とともにミシンを置く納屋などを設けた家屋の減少や、職業選択としてサー



「広報今治 いまばり」の表紙にて

村上氏と受講生の様子を掲載

（出典：今治市「広報今治 いまばり」

No.354（2023年11月号）より引用）

ビス業へのシフトなど、ハム縫いを内職とする女性が減っており、また高齢化している。今治タオル工業組合では、ミシンのメーカーと共同で半自動タオルハム縫製機を開発するなど機械化を進めてきたが、それでは追いつかないため、今回の養成所開設の運びとなった。

受講生は、一般のミシン未経験者および経験者、タオルメーカーから派遣された従業員などさまざまであり、工業用ミシンをつかったハム縫いのノウハウを村上氏の指導のもとで実践的に学んでいる。今治タオル工業組合は、修了者への就職斡旋もおこなっており、タオル業界の人材不足を補っている。

（次号につづく）

